

厚生労働省によると、「ヤングケアラー」とは「家族にケアを要する人（高齢者、病人、幼児等）がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や世話、介護、感情面のサポートなどを行っている 18 歳未満の子ども」と定義されています。

自分がヤングケアラーであるという自覚がなく、周囲も「単なるお手伝い、親孝行」と見ていることから、問題が潜在化しやすい（＝表面化しにくい）等の課題が指摘されています。

全国調査の結果によると、世話をしている家族が「いる」と回答した子どもは、中学 2 年生で 5.7%、高校 2 年生で 4.1%。つまり約 20 人に 1 人ということになります。さらに、このうち「ほぼ毎日している」中高生は 50%に上り、その 10%は 1 日平均 7 時間以上しているそうです。このデータを本市に置き換えると、1 日 7 時間以上の子どもは 35 人程度いることになります。

5 月の上旬に NHK で放送された『初めての“修学旅行”9 歳から介護をした男性が失っていた時間～SOS なき若者の叫び』を観ました。正直なところ、自分が想像していたものをはるかに超え、大きな衝撃を受けました。このタイトルで検索いただけますとパソコンで視聴できますので、是非ご覧ください。

県では 7 月に初めての実態調査を行います。県内の実態をつかみ、分析して、対策につなげていかなければなりません。

ヤングケアラーは子どもたちの今と、これからの進学、就職、結婚等にも影響してくる大きな問題です。

解決のためには地域や学校、福祉、保健、医療など、関係する分野・機関の連携が重要です。足利市では現在、より充実した相談・支援体制の構築に向けて動いています。

人知れず毎日ひとりで耐えている子どもの存在があります。足利市全体で、市民みんなで、ヤングケアラーに対する理解や認知を進めながら、早期に発見し、適切に介入し、子どもとその家族への支援が行えるように、全力で取り組んでいきます。